



きみの友だちを読んで

上原中学校 二年三組 田中 咲穂

『誰かに名前を呼ばれることは、とてもうれしい。誰かに「欲しい」と思われることは、とても気分がいい。だから、嫌な子は、そこを狙ってくる。名前を呼ばないことで、その子を消し去ってしまう。「あんたは、いらない」指でピンと遠くにはじくことで、居場所をなくしてしまう。そして、そういう子はいつだって「みんな」の中に隠れて、にやにや笑っているのだ。』

怖い。この本を読んで一番最初にこう思った。本やドラマの世界では「いじめ」がある。しかしいじめはなかなか身近にはない。私達の世界には「仲間外れ」が多い。学校のいじめを題材にしたものは、いじめが何か分からなくなる。水をかけたり、下駄箱を荒らしたり……。そのようなことが書かれている。確かに実際あるのかもしれないが、私は見たことがない。印象が強いのはいいけれど、陰口や仲間外れはいじめではないと思うってしまう。実際一番身近なのは仲間外れだ。誰かの陰口を叩いてのけ者にする。この本では仲間外れについて書かれている。短編の一つ一つに共感できる。共感できてしまった。

のけ者にされた子自身に何らかの原因がある場合。周りの子が悪者に仕立てあげた場合。仲間外れが起こる原因は、この二つが主だと思っていた。大半は後者。私達の中で、非の打ち所がない完璧人間はいない

と思う。よく言われるのは、人の良い面よりも悪い面の方が見つけやすいということだ。私も、そうだ。誰でも陰口を叩かれたことがあると思う。でも、叩いたこともあると思う。陰口が大きくなると、途中で尾ひれがついて根も葉もないうわさが流れる。それを注意すると、今度は自分が何人かから、うざい、などと思われて仲間外れにされてしまう。中学校でも一度、話題になった。

この二つが全てだと思っていた。しかし、この本を読んで、もう一つのパターンを見つけた。今まで気付いていたけれど、無視していたのかも、しれない。それは、とても仲がいいからこそ起きる仲間外れ。親友や、幼馴染のような深い付き合いの中で起きやすい。仲のいい子に何かいいことが起きると、その自分との差が自分を苦しめるというものだ。確かに私もそう思ったことはたくさんある。悔しい、そう思った。でも私はかなりの楽観的思考で、そのことについて深く考えない。相手にいいことがあったから、次は私に来るかもしれない。だったら一緒に喜んで方がずっと楽しい。それに、悔しいなんて思って自分一人で抱え込むなら、その気持ちを正直に口に出して、相手と笑い話にした方がいいじゃないか。そう考えてしまう。でもこれは私の中だけでの話で、確かにこの差を重く捉えて苦しいと感じている人もいるのかもしれない。一緒に育ってきたからこそ、ねたましく感じたりするのかもしれない。そう考えると初めの2つは「仲間外れ」でこれが「仲間外れ」だと思えた。

私達の中で、誰かを仲間外れにすることでストレスの吐き口にしよう

うと考えている人はいない。しかし、外されなかったために外す人は大勢いる。私もその仲間なのだろうと思う。外されるのも外すのも嫌だ。陰口が広がり、その陰口を面白がり尾ひれがついて更に広まる。リーダー格の子も言い始めてしまうと、仲間外しが始まる。すぐにみんなは飽きるが、リーダー格に話を合わせないといけない。リーダー格が飽きた頃には、別の子の陰口がみんなの中で広まっている。大人に見つかるといじめの話になり、全員同じようにしかられる。でも、いじめがそもそも明確ではないから、こりずに続ける「嫌な子」と、嫌われたくない「みんな」はやめることができない。

今更後悔しても、とは自分でも思うけれど、この作文を書いていると胸の辺りが重いような、痛いような感じがする。仲間外しはなくなるだろうか。多分、なくなることはないだろう、と私は考えた。考えれば考えるほど、分からなくなってしまうた。お互いを尊重し合う。陰ではなく面と向かって言葉をぶつけてみる。たくさんの案が出てきたが、どれも違うと感じた。しかし、その考えた過程があることで、作文を書く前と、今の私では少し変わった気がする。答えはないのかもしれないけれど、考えてみるのはいいかもしれない。たまに、この作文を書いたことを思い出し、悩んでみたい。

十三才の私と、未来の私の差はなんだろうな。あ、自分に負けるのは嫌かも。